季刊誌『生産と技術』が取り持った85年ぶりの運命的な出会い

海外交流

塩　谷　茂　樹*

A Fateful Encounter after 85 Years,
Arranged by the Quarterly Magazine "Manufacturing & Technology"

Key Words：Fateful Encounter, 85 Years, Manufacturing & Technology

はじめに

わが大阪大学外国語学部モンゴル語専攻は、1921年（大正10年）開校以来、2021年で創立100周年を迎えたが、その間、草創期の大阪外国語学校・蒙古語部（1922年4月～1944年3月）時代のモンゴル人教師に、中国内モンゴル出身のフールンガ先生（在職期間1929年9月1日～1939年3月31日）という方がおられた。戦前・戦中・戦後数年間（1920年代から1940年代末まで）のほぼ30年近く、最も苦難の時代にモンゴル語教育を全面的に支えられた五人の内モンゴル出身の先生のお一人である。

さて筆者は、本季刊誌 第76巻 第1号（2024年）に「大阪でのモンゴル語教育100年の歴史を振り返って」というタイトルの一文を寄稿したが、その寄稿文をたまたま目にされたのがフールンガ先生のお孫さんであるアスハン氏（1968年～）であり、昨年日本で起業されたばかりで、ご祖父の日本での軌跡を探っておられた矢先の出来事であったようだ。これはまさに本季刊誌が取り持った「ご縁」であり、フールンガ先生が本国へ帰国された1939年3月31日から数えて、85年の時を超えた今年2024年7月に、お孫さんと大阪大学の同じくモンゴル語教育の場である箕面キャンパスで運命的な出会いを果たしたというエピソードを紹介する所存である。

フールンガ先生の経歴と人物

フールンガ（モンゴル語ラテン文字転写：Fülüngγa、漢字表記：福隆阿）先生は、中国清末期の1900年6月26日生まれ、チャハル左翼タイブス（太仆寺）旗（現在の内モンゴル自治区シリンゴル盟タイブス旗グンボラグ蘇木）出身である。名前は、fulin《天命、福》-ngga《～のある》> fulingga《天命を受けた、福のある》という意味の満洲語に由来する。父セレンドンロブの影響で、幼少よりモンゴル語教育を受けた教養ある知識人であったが、1929年9月1日から1939年3月31日の9年半にわたり、草創期の大阪外国語学校・蒙古語部に招聘され、大阪でのモンゴル語教育に非常にご尽力された。大阪外国語学校の当時の満蒙研究会発行の『朔風』第2号（1932年）に、フールンガ先生に関する記述がある。「蒙古のモダン・ボーイ、稀に見る温容な教師、福先生（当時フールンガ先生は学生から「フー先生」と呼ばれていたようである）の時間は、他の法律たら経済たら云うヤヤッコシイ課業で硬化した頭脳を潤ほし打寛いだ嬉しい時間であります。で、誰云うとはなしに福先生の時間を「オアシス」と称える様になりました。…中略… 怒ることを知らない先生、羊の様におとなしい先生、処女の

フールンガ先生
（1935年11月 大阪外国語学校内にて）

* Shigeki SHIOTANI
1960年1月生まれ
京都大学大学院　文学研究科　言語学専攻博士後期課程（1991年）
現在、大阪大学大学院人文学研究科　外国学専攻　教授　文学修士
専門／モンゴル語学、モンゴル口承文芸
TEL：072-730-5263
E-mail：
shiotani.shigeki.hmt@osaka-u.ac.jp

純真とデリケートな神経の持主（原文ママ）」と、戦前の蛮カラな男子学生にとっても、まるで神様のように温厚な存在であったと言える。

また、1936年1月18日付、大阪朝日新聞朝刊第5面に、「『蒙古の唄』を踊る、成吉思汗踊りを創作ー蒙古人の生活をうたった十六節の長歌」と題する記事が内モンゴルの楽器四胡を手にした先生の写真入りで掲載されている。細身で長身の先生は、音楽をこよなく愛し、楽器の演奏にも精通していたようだ。

一方、日本人専任教員としては、蒙古語部第1回卒業生の椿松（あべまつ）源一（1903年2月7日～1993年2月18日）先生が1925年3月卒業後、1929年7月23日から1968年3月31日までの40年近くの長きにわたり、本学のモンゴル語教育のまさに重鎮として、「大阪に椿松あり」の名を国内外に轟かせた。前任者の鈴江萬太郎（在職期間1928年9月10日～1929年6月23日死去）氏の急逝に伴い、椿松先生が急遽着任されてからほぼ1か月後に、フールンガ先生が本学に赴任された。椿松先生にとって、赴任後、最初に出会った内モンゴル出身のモンゴル人教師であり、着任時、椿松先生は26歳、フールンガ先生は29歳で、まさに腹心の友だったに違いない。

フールンガ先生と椿松先生
（1937年4月24日 蒙古語部 新入生歓迎会にて）

フールンガ先生自筆：Talarqaqu üges「謝辞」
『朔風』第8号（1939年2月）

フールンガ先生は、日本の「カレーライス」が大の好物だったようで、学生たちの間でつとに有名なお話として語り継がれている。在職中は『蒙古語会話読本（初等・中等・高等）』（1932年、甲文堂書店）の3冊を執筆される等、教育のみならず、モンゴル語教材の開発に大いに貢献された。1939年3月31日任期満了のため、39歳で帰国後は、中国の各署でモンゴル語教師やモンゴル語翻訳の職務を務めたが、1952年2月22日に享年53歳（満51歳）の若さで、フフホトで肺病のため逝去された。

ご子息メルゲジフ氏のこと

フールンガ先生には7人のお子さん（男4人、女3人）がおられ、そのうち三男がメルゲジフ（モンゴル語ラテン文字転写：Mergejikü、漢字表記：莫尔吉胡）氏である。名前は《専門となる》という意味のモンゴル語である。1931年5月28日北京生まれ、父フールンガ氏と同じ内モンゴル自治区シリンゴル盟タイブス旗出身である。1932年～1933年頃に来日し、幼少時代を父母とともに大阪で過ごし、日本の幼稚園、尋常小学校に通った。漢語と日本語の両方を学んで7歳で帰国する。その後、氏は中国・内モンゴルの国家級作曲家となり、民族音楽理論家として活躍された。また、教育者として内モンゴル芸術学院の院長を務めるなど、誰もが知る著名人である。

内モンゴル自治区芸術「サラナ」賞、金鶏賞、モンゴル人民共和国金賞他、多数受賞された。2017年5月19日、享年86歳で逝去された。

メルゲジフ氏（1931年～2017年）

2016年3月から8月にかけて来日し、病気治療のために兵庫医科大学病院に入院した際、父の軌跡をたどって、戦前・戦中（1921年から1946年）の大阪外国語学校「上八学舎」のキャンパスを訪れたが、

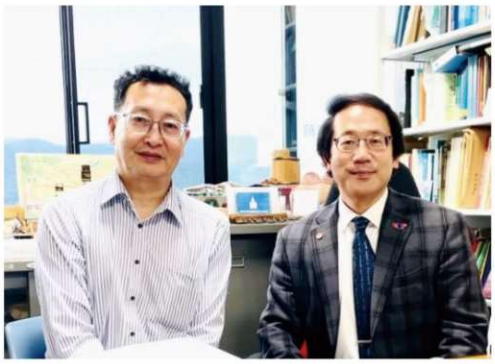
そこにはすでに学校は存在しておらず、それ以上の追跡は当時かなわず断念されたそうだ。ちなみに跡地は現在、大阪国際交流センター（大阪市天王寺区上本町8丁目2−6）となっている。

7歳まで育った大阪で、51歳でこの世を去った父の面影を探し求めたが、過去と現実の狭間で、85歳の彼の脳裏に一体どんな思いが去来したのか、今となっては知る由もない。

お孫さんアスハン氏との運命的な出会い

運命的な出会いは、何の前触れもなく突如として訪れた。本年7月11日、奇しくもモンゴル国では、国民のスポーツの祭典「ナーダム」当日に、1本のメール連絡が入った。以前、日本モンゴル学会でお会いしたことのある、今春京都大学大学院を修了された内モンゴル人留学生から、本人ではなく友人が筆者を表敬訪問したいとの内容だった。その経緯は、筆者が本季刊誌に以前寄稿した「大阪でのモンゴル語教育100年の歴史を振り返って」第76巻 第1号（2024年）を目にして、ぜひ一度お会いしたい。なぜならば、その文章に登場する「フールンガ」とは、その友人の祖父であり、近年中国・内モンゴルで出版された『フールンガ著作集（上・下）』（2006年）をぜひ贈呈したいとのことだった。筆者は、大阪外国語大学創立100周年記念として『大阪外国語大学・大阪大学外国語学部100年史 写真で振り返る100年』（2021年5月）で、モンゴル語を担当（pp.85-92）し、その中でフールンガ先生のお写真を4枚掲載したので、筆者もぜひ先生のお孫さんにお会いしたいとすぐに快諾の返事をした。

2024年7月13日（土）午後15時、箕面船場キャンパス、正面入口でお会いする約束をした。すると、かなり長身の二人の男性が現れ、そのうちの一人がフールンガ先生のお孫さんでした。お名前は、アスハン（モンゴル語ラテン文字転写：Asqan、漢字表記：阿思汉）氏で、身長は180㎝を優に超える長身である。名前は《まっすぐな》という意味のモンゴル語である。メルゲジフ氏には3人の子供（男1人、女2人）がおり、アスハン氏は1968年生まれの真ん中の長男である。つまり、フールンガ先生の三男がメルゲジフ氏、メルゲジフ氏の長男がアスハン氏であり、まさにフールンガ先生のお孫さんとの直接の対面となった。



アスハン氏と筆者
（2024年7月13日 大阪大学箕面個人研究室にて）

さらに、アスハン氏から、近年中国・内モンゴルで出版されたチョロー評注『フールンガ著作集（上・下）』（2006年）内蒙古人民出版社 をありがたくも贈呈していただいた。

『フールンガ著作集』（2006年）

氏は昨年来日し、京都でコンピューター会社を起業された。イギリス国籍で、お母様は中国・内モンゴルでご健在、ご家族はイギリスにお住まいで、お仕事は日本でされており、3か国を股にかけてご活躍中である。

フールンガ先生のご帰国の1939年3月31日から数えると、まさに85年ぶりの運命的な奇跡の出会いである。本季刊誌に2024年第1号をもし筆者が寄稿していなかったら、寄稿したとしても、もしアスハン氏の目に触れることがなかったら、この出会いは決して実現しなかったと思われる。午後15時から午後18時50分までの4時間近くの対面はまさに夢のようなひと時であった。今から95年前の1929年9月1日にモンゴル語教師として来日された先生を知る日本人は、もはやこの世に誰一人として存在しない。しかし、アスハン氏と直接モンゴル語だけでお話しし、ご祖父フールンガ先生の大阪外

国語学校時代の数少ない貴重な数枚のお写真をお見せし、お父様メルゲジフ氏のことをお伺いすると、お二人とお会いすることのなかった筆者にとって、同じ出身地であるアスハン氏の話すモンゴル語を耳にしながら、おそらくフールンガ先生も同じような方言（モンゴル語チャハル方言）で当時の学生に対して穏やかに授業をされていたのだろうと想像が膨らむばかりである。

また、フールンガ先生が本学で教鞭を執られた1929年から1939年にかけては、満州事変（1931年）、上海事変（1932年）、日中戦争（1937年～1945年）など、日本と中国の関係は非常に緊迫しており、極めて敵対的であったことを考えると、先生の日本における写真が本国には1枚も残っていないことは驚くに足らないと言えよう。しかしながら、その後の調査で、1939年に本国へ帰国してから1952年に亡くなるまでの間のフールンガ先生の様子がわかる写真を何とか見つけてほしいと依頼したが、当時の写真は1枚も存在していないとの回答を受け、驚きとともに非常に遺憾に思った。

最後に、本学のシンボルと言える「烈士之碑」の前で、記念撮影することにした。本学の過去を振り返ると、戦前の「満蒙大陸進出」という国策と相まって、皮肉にもモンゴル語教育が注目を浴びた最も苦難に満ちた激動の時代に、卒業後間もなく大陸で殉死した5名の卒業生のうち4名が蒙古語部卒であったこと、また殉死者の御霊を祀るため、1938年6月5日「烈士之碑」が建立された過去の歴史がある。

碑の前に立つ蒙古服を着た徳王デムチュクドンロブ、右から2番目楠松源一先生と4番目フールンガ先生（1938年11月8日 大阪外国語学校上八学舎にて）

アスハン氏と筆者（2024年7月13日 大阪大学箕面船場学舎にて）

撮影場所は上八学舎と箕面船場学舎で異なるとはいえ、建立当時と同じ石碑の前での撮影は非常に感慨深いものだった。

帰り際に次回の再会を堅く約束すると、85年の時空を超えて、まるでフールンガ先生と直接お会いしたかのような高揚感と感動が今でも鮮明によみがえってくるのである。本季刊誌のご縁に深く感謝する次第である。

追記：

後日、アスハン氏から、祖父フールンガ先生の生家跡地（内モンゴル自治区シリンゴル盟タイブス旗グンボラグ蘇木）と復元された生家の模型の2枚の写真を提供していただいたので、ここに提示したい。

最初の写真はフールンガ先生の生家跡地で、現在は3本の木以外に何も残っていないようだ。また、次の写真は、グンボラグ蘇木博物館にある生家の復元模型であり、往時の様子をうかがい知ることができる貴重なものと言えるであろう。

参考文献

・内田 孝（2004年3月）「大阪外国語大学におけるモンゴル人教師（1922-1950）」pp.43-64『内陸アジア史研究』東京

・『大阪外国語大学・大阪大学外国語学部100年史 写真で振り返る100年』（2021年5月）大阪外国語大学創立100周年記念事業委員会 モンゴル語 pp.85-92 大阪

・『朔風』（1932年3月）第2号 満蒙研究会 甲文堂 大阪

カワセミ